



感情の適応的機能-感情知能・感情コンピテンス・感情自己効力感に着目して

森口, 竜平

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2):17-24

(Issue Date)

2009-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001012>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001012>



感情の適応的機能－感情知能・感情コンピテンス・感情自己効力感に着目して

The adaptive function of emotion

－ Focus on emotional intelligence, emotional competence, and emotional self-efficacy

森 口 竜 平*

Ryuhei MORIGUCHI*

要約：本研究の目的は、近年国内外においてなされている感情の適応的機能に関する研究を概観し、概念を整理することと、今後感情の適応的機能をいかに不適応予防介入プログラムやスキルトレーニングに応用していくのかについて考察することであった。今回、感情の適応的機能として、感情知能、感情コンピテンス、感情自己効力感について取り上げ、それらに関連する実証的研究についてのレビューを行い、概念の整理を行った。その結果、感情知能の能力モデルは感情の情報処理能力に焦点を当て課題遂行型検査を用いて測定され、独自の立場を築いている点、感情知能の特性モデルについては、その概念に感情の機能に関する自己評価に加え、パーソナリティ特性も含められており、パーソナリティ特性との弁別がされていない点、感情コンピテンスは、特に社会的状況や文化を重視している概念で、感情を引き起こす場面における素朴な効力感と考えられる点、感情自己効力感は、感情に関する具体的行動の遂行可能性の予測と捉えられる点が挙げられた。最後に、感情の適応的機能を不適応予防介入プログラムなどに応用していくために、感情自己効力感に焦点を当てた感情の適応的機能を適切に測定し、その効果を明らかにすることが今後の課題として挙げられた。

1. はじめに

これまでの感情研究においては、感情とは理性や認知を阻害するものという前提があり、感情の否定的側面に焦点が当てられてきた。しかし、近年、感情は理性あるいは認知と対立するものではなく、それらと協調的に結びつき、人の種々の適応を支えるものと考えられるようになってきている（遠藤，2007）。そのような観点では、感情は「人と環境との関係を築いたり、維持したり、壊したりするプロセス」とされ（Campos, Campos, & Barrett, 1989）、人と環境との関係が変わる際のきっかけともなりうるとされている（Lazarus, 1991）。さらに、感情に関する能力、たとえば感情を知覚したり、使ったり、理解したり、管理する能力が、個人の社会的適応に寄与することも指摘されている。（Denham, Blair, DeMulder, & Levitaal, 2003; Eisenberg, Fabes, Guthrie, & Reiser, 2000; Feldman, Philippot, & Custrini, 1991）。このような点から、人間が社会生活を円滑に過ごして行くために感情が非常に重要なものであることがうかがえる。近年、感情が社会生活の中での対人関係とどう関連するのか、また、課題の解決にはどう利用されるのかといったような感情と社会生活及び感情と認知活動という観点から研究が行われている（崔・新井, 1997）。

また、わが国においても思春期や青年期の子どもたちの「キレる」

現象や、周りに合せすぎるといった過剰適応の問題など、気持ちを出しすぎてしまったり、逆に過度に気持ちを抑えすぎたりするような感情に関する問題が顕著になっている（大嶽・五十嵐, 2005）。このような状況の中、円滑な対人関係を築き、維持することに寄与すると考えられる感情の適応的機能についての研究を行うことは非常に意義のあることと思われる。

感情の適応的な機能に関する概念の中で、近年、感情知能 (emotional intelligence)、感情コンピテンス (emotional competence)、感情自己効力感 (emotional self-efficacy) といった概念が注目されており、これらの概念が社会的適応や心理的適応に及ぼす影響について、海外では実証的研究が既に多数行われている（Ciarrochi, Deane, & Anderson, 2002; Lopes, Brankett, Nezlek, Schutz, & Salovey, 2004）。最近、日本でも感情の適応的機能は注目されはじめており、少しずつ研究されるようになってきている（大竹・島井・内山・宇津木, 2001; 相川, 2001; 久木山, 2002）。

一方で、これらの概念は類似しており、混同して用いられているという問題がある（Ciarrochi & Scott, 2006）。上述したように、これまでこれらの概念と社会的適応や心理的適応との関連について検討されているが、概念的に混乱したままなされているため、それ

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程後期課程

(2008年9月1日 受付)
(2009年1月16日 受理)

ぞれの概念で同じ感情機能について検討している可能性もあり、それぞれの概念を正確に測定し、実証的に研究していくためには概念の整理が不可欠である。

また、大対・大竹・松見(2007)は、最近社会適応行動における感情の機能が重要視されるようになったことから、感情へ直接アプローチした不適応予防介入プログラムが開発され、その効果の検証が進められていると指摘している。さらに、大対ら(2007)は、このような介入プログラムの多くは、実証研究に基づく理論的背景が乏しいことを指摘し、感情研究と実践研究の間にはギャップがある(Izard, 2002)とも指摘している。このように、感情の適応的機能が子どもの不適応予防などに果たす役割は非常に大きいと考えられ、今後はこの感情の適応的機能を予防的介入やスキルトレーニングに応用していく必要があるだろう。応用していくにあたり、まず感情の適応的機能を適切に測定し、その効果を明らかにすることは必要不可欠である。そのためには、感情の適応的機能についての概念を整理した上で尺度を作成し、介入やスキルトレーニングにつながるように実証的研究を進めていく必要があると思われる。

そこで、本稿では、感情知能・感情コンピテンス・感情自己効力感に関する研究について概観し、概念的な整理を行った上で、不適応予防などに実践的にアプローチを考慮に入れた感情の適応的機能について考察することを目的とする。

2. 感情知能

Mayer(2001)によると、1900年～1969年までの間、知能研究と感情研究は別分野での研究と見なされてきた。知能分野では初めて知能テストが作られるなど、知能を測定する試みがなされた。また、感情研究の分野では、感情それ自体が何か、どのように知覚されるのかなど、感情への生理学的及び感覚・知覚の分野に関心を持って研究が行われた(Darwin, 1872; James, 1884; Cannon, 1927)。一方、1970年以降には、感情と知能はいかに相互作用しているのかということに関心が持たれ、感情が多くの認知的機能(記憶、注意、意思決定)に影響するという研究が蓄積されてきた(Damasio, 1994; Forgas & Moylan, 1987; Mayer & Bremer, 1985; Salovey & Birnbaum, 1989; Singer & Salovey, 1988)。また、同時期にGardner(1983)も、従来からの言語的・認知的知能だけでなく、人間には空間的知能・芸術的知能・対人的知能など8から9つの多岐にわたるさまざまな知能が存在する知能の多重性を主張しており、対人的知能の中には感情を知覚し、象徴化する能力が含まれるとしている。

こうして感情と知能の統合が目指される中、Salovey & Mayer(1990)は、知能に対する感情的能力の役割についての統一した枠組みを、「感情知能」として理論化した。Salovey & Mayer(1990)は、感情知能を“感情情報処理の一種であり、自己と他者の感情の正確な評価、情動の適切な表現、および人生の質を高めるような形で適応性の感情制御を含むもの”と定義した。その後、この定義は“感情の意味および複数の感情の間の関係を認識する能力、ならびにこれらの認識に基づいて思考し、問題を解決する能力”と再定義されている(Mayer, Carso, & Salovey, 1999)。こうしてMayerらは、知能と感情の相互作用を考える統合的な概念として、「感情知能」という概念を提唱し、感情知能を測定した上での実証研究を試みた。

一方、感情知能という概念は、Goleman(1995)による『Emotional

Intelligence(日本では、「EQ:こころの知能指数」というタイトル)によって紹介され、科学者だけでなく多くの大衆の関心を集めることになった。Golemanは、感情知能を人生における成功を予測に最も役立つ、誰にも理解できる概念として考えた。Golemanは、感情知能には、自己覚知や自己制御、動機付け、共感、対人的スキルなどを含むと考え、Salovey & Mayer(1990)が提唱した定義にパーソナリティ特性を含めることにより、感情知能をより包括的なものとして考えた。さらにBar-on(1997)も同様に、感情知能を“さまざまな非認知的能力、才能およびスキルからなり、環境からの要求および圧力に適切に対応する能力に影響するもの”と定義している。感情知能の下位概念には、対自己領域(自己覚知、自己主張、自己信頼、自己実現)、對他者(共感、対人関係、社会的責任)に加えて、ストレスマネジメント、適応性、一般的気分なども含まれているなど、感情知能をより包括的な観点から捉えることを試みた。このように、GolemanやBar-onは、動機づけや対人関係への対応なども感情知能に含めると考えており、Golemanらは、感情を処理する能力だけでなく他のパーソナリティ特性も含めたもの感情知能として考えている(Mayer, 2001)。

このような経緯から、現在、感情知能研究はSalovey & Mayer(1990)が提唱した定義をそのまま用いた研究と、GolemanやBar-onが提唱したように性格的特性をも含む定義を用いた研究の2種類に分かれている(Branckett, River, Shiffman, Lerner, & Salovey, 2006)。

Salovey & Mayer(1990)の定義に沿った研究は、感情知能を「感情について正確に論理的に考える能力であり、感情を使用し、感情の知識を思考を高めるために利用する能力」として捉えており、感情の能力自体に注目している。従って、Salovey & Mayer(1990)が提唱した理論に基づいた感情知能は「能力」の側面を強調しているので、能力モデル(ability model; 以下、能力モデル)と呼ばれる。

また、Mayer & Salovey(1997)は感情知能の機能として以下の4つの働きを考えている。1つ目は、「情動の知覚(ceiving emotion)」であり、自己ならびに他者の感情を気づく能力であるとしている。2つ目は、「情動を利用すること(using emotion)」つまり認知的活動に感情を生かす能力である。3つ目は、「情動を理解すること(understanding emotion)」4つ目は、「情動を管理すること(managing emotion)」つまり自分自身や他者における情動反応を減少させたり高めたり、和らげたりする能力である。Mayer, Carso, & Salovey(1999)は、この4つの機能を測定するために、課題遂行型検査であるMultifactor Emotional Intelligence Scale(MEIS)を作成しており、さらにMayer, Salovey, & Carso(2002)は、MEISの欠点を修正したMayer-Salovey-Carso Emotional Intelligence Test(MSCEIT)を作成している。MSCEITは、特別な感情問題を記述した小物語などを用い、そこで考えられる行動が効果的かそうでないか評定してもらうことにより多面的な感情知能を測定する。それらの反応は、専門家かまたは一般的な人による反応とどのように一致するのかによって得点化される。現在の能力モデルに関する研究では、MSCEITと社会的機能などとの関連について検討するものが中心となっている(Branckett, Mayer, & Warner, 2004; Lopes, Salovey, & Straus, 2003)。

他方、Goleman(1995)やBar-On(1997)が提唱した理論

に基づく感情知能は、パーソナリティ特性を含め包括的に捉えられているため、特性感情知能やミックスモデル (trait EI or mixed model: 以下、特性モデル) と呼ばれている (Petrides & Furnham, 2000)。このモデルでは、おもに感情知能の一般的な部分に基礎を置いている (Goleman, 1995)。特性モデルにおける感情知能の定義には、パーソナリティ特性をはじめ、認知された感情能力やコンピテンスも含まれている (Brannkett et al. 2006)。例えば、Bar-On (1997) では、感情知能モデルに関係を操作するような認知された能力や、楽観性のようなパーソナリティ特性を含んでいる。特性モデルの研究では、感情知能を測定する際に自己評価尺度が主に用いられている (Bar-on, 1997; Boyatzes, Goleman, & Rhee, 2000; Petrides & Furnham, 2000)。Boyatzes et al. (2000) は、Goleman (1995) の理論を元に Emotional Competence Inventory を作成しており、Bar-on (1997) は先述の5つの領域を踏まえた、EQ-i (感情知能尺度) を作成している。しかし、自己評価尺度と既存の人格特性尺度との間には高い相関がみられ、これらの感情知能の自己評価尺度は従来のパーソナリティ尺度で測定されている以上のものは測定されないという批判もなされている (Davis, Stankov, & Robert, 1998)。

また、課題遂行型検査を用いて測定した感情知能と、自己評価を用いて測定した感情知能との間に低い相関しかみられず、それぞれが違う感情知能を測定している可能性も指摘されている (Brannkett & Mayer, 2003)。さらに、Brannkett et al. (2006) は、課題遂行型検査 (MSCEIT) と、Salovey & Mayer (1990) の理論に基づいて作成された自己評価式尺度を用いて、それらの関連を調べた上、社会的機能との関連について検討している。その結果、MSCEIT と自己評価式尺度とは低い相関しか見られず、社会的機能を予測したのは MSCEIT のみであった。この結果から、感情機能の自己評価は感情知能を正確に測る指標ではない可能性や、課題遂行型検査と自己評価式尺度は感情知能の中でも異なったメンタルプロセスを測定している可能性が示唆された。

以上、感情知能研究における歴史、そして現在では能力モデルと特性モデルの2分野に分かれていることについて述べてきた。まとめると、能力モデルでは、Mayer et al (2002) が作成した MSCEIT を用いた研究が多く見られ (Lopes et al., 2003; 2004)、感情の情報処理能力のみに焦点を当て、その独自の立場を築きつつある (Petrides & Furnham, 2000)。他方、特性モデルでは多くの尺度が作成されているが、パーソナリティ特性と弁別の問題が指摘されている。特性モデルを測定する尺度で、最も広く使われている EQ-i でも、well-being や神経症傾向、抑うつ傾向と強く関連していることが明らかにされている (Bar-On, 1997, 2000; Brannkett & Mayer, 2003; Dawada & Hart, 2000; Parker, Taylor, & Bagby, 2001)。特性モデルに関しては、パーソナリティと如何に弁別しようのかという問題を解消できないのが現状である。

3. 感情コンピテンス

感情コンピテンスは、他者と相互作用したり、関係を構築したりするための子どもの能力にとって重要である (Parke, 1994; Saarni, 1990)。Saarni (1997) は、自身の研究や感情に関する実証的研究から、感情の適応的機能について感情コンピテンスという用語を用いて説明している。Saarni (1997) によると、感情コンピ

テンスは、「感情が引き出される社会的相互作用の中における自己効力感の現れ」と定義される。

Saarni (1999) は、感情コンピテンスの背景にある理論として、Lazarus (1991) の感情関係性モデルや Campos et al. (1989) の感情機能主義モデル、社会構成主義を挙げている。感情関係性モデルと感情機能主義モデルを基盤として、個体と環境の相互作用により生まれる、ダイナミックな社会的文脈を強調していると述べている。また、Saarni (1999) は、自身の構成主義の捉え方について、厳密な社会的構成主義とは異なり、その個人だけが経験するものとしての社会的履歴と認知発達理論が統合されて、感情経験が創造されるということを強調するとしている。Saarni (1999) は、感情コンピテンスの理論的基盤について、これら3つの理論を明らかに異なる視座として捉えるのではなく、1つに収束するものとして捉えている。

そもそもコンピテンスという概念は、変わりやすい社会的、物理的環境を相手にして、個人に成長と熟達をもたらす能力とされており (White, 1959)、人と環境との相互作用の結果得られるものとして考えられる。また、Saarni (1999) は、定義の中に Bandura (1977) が提唱した自己効力感という概念を用いたことに関して、感情を引き起こすような社会的相互作用に応用されることにより、人々が状況に応じてどのように感情面で反応するのか、また戦略的に感情の知識を利用し、適切に感情の表出をしているのかを検討することができる」と指摘している。Saarni (1999) は、感情コンピテンスの中にある効果的な機能を強調するため、自己効力感という概念を取り上げており、コンピテンスと自己効力感という概念はある程度同義として用いられている。

また、Saarni, Campos, Camras, & Witherington (2006) によると、感情コンピテンスは、その下位概念に感情に関するスキルが仮定される概念である。つまり、感情コンピテンスは、感情が引き出されるような社会的相互作用において自己効力感をもつために必要なスキルから成り立っている (Saarni et al., 2006)。Saarni (1999) は、感情コンピテンスを構成するスキルとして、自己の情動状態に気づく、状況や表出を手がかりに他者の情動を理解する能力、情動や表出を自己の文化に適切な言葉を使って表現する能力、他者の情動経験に共感的にかかわる力、内的主観的情動経験が外的情動表出と一致しないこともあることを認識する力、嫌な情動や苦悩に対して自己制御方略を用いて適応的に対処する力、関係性や関係の構造に情動のコミュニケーションを通じて気づく力、情動の自己効力感の能力の8つのスキルを設定している。これらの8つのスキルは、感情発達の分野における実証的研究をまとめた結果えられたものである (Saarni, 2007)。さらに、Saarni (1999) は、感情コンピテンスを獲得した際の効果として、感情の管理やストレス状況下における自尊感情の高揚、レジリエンスを挙げている。

Saarni (1990) が感情コンピテンスという概念を提唱して以来、これまでに感情コンピテンスと社会的な成功を予測する変数などとの関連を検討している研究は散見される。(Denham et al., 2003; Ciarrochi & Scott, 2006; 久木山, 2002)。

Denham et al. (2003) は、子どもの感情コンピテンスが社会的コンピテンスを予測するという仮説を検証するために3~4歳の時点の感情コンピテンスと、3~4歳時点及び5~6歳時点の社会的コンピテンスを測定した。その結果、感情コンピテンスが両方の時

点の社会的コンピテンスに影響することを示した。

Ciarrochi & Scott (2006) は、感情コンピテンスの各側面と不安やストレスや well-being との関連について縦断的に検討し、「感情の特定及び述べることの困難さ (difficulty identifying and describing)」は、不安を増大させ、肯定的影響を減少させていること、「感情をマネジメントすることの困難さ (difficulty managing emotions : ex.rumination)」は肯定的影響を減少させていることを明らかにし、ある時点での感情コンピテンスは、後の well-being を予測すると結論付けている。

久木山 (2002) は、Saarni (1999) の理論に沿った情動コンピテンス尺度の作成および信頼性の検討を行い、自尊感情・友人関係満足度との関連を検討している。その結果、情動コンピテンス尺度の下位尺度として6つの因子 (「ネガティブな情動の影響への対処」、「状況の読み取り」など) を抽出し、自尊感情・友人関係満足度との相関を検討した。その結果、情動コンピテンス尺度と自尊感情・友人関係満足度との間に十分な相関がないことから、情動コンピテンスと自尊感情・友人関係満足度の間には直接的な関連ではなく、他の要因を媒介した間接的な関連が存在すると指摘している。

このように、感情コンピテンスは、感情の適応的機能を示す概念として、Saarni (1999) によって提唱され、その定義、構成要素、効果などについて言及されている。提唱されて以来、感情コンピテンスに関する実証研究は徐々に増え始めている。その一方で、感情コンピテンスの定義に自己効力感が含まれている点や、感情コンピテンスを構成するスキルが研究者間において一致していない点、状況的要素を重視するなど、社会構成主義を背景とする概念を実証的研究で捉えようとしている点など、さまざまな問題があると考えられるが、今のところ詳しく検討されていない。それらの問題点について、後に他の感情知能や感情自己効力感などの概念と比較する中で、考察していくことにする。

4. 感情自己効力感

先述したように、Saarni (1999) は感情コンピテンスの概念を提唱し、その中で自己効力感の概念を援用しているが、近年、感情分野において自己効力感そのものを取り上げる研究が見られるようになってきている (Petrides & Furnham, 2003 ; Petrides, Sangareasu, Furnham, & Fredrickson, 2006 ; Kirk, Schutte, & Hine, 2008)。

これまでに、ある分野に対する自己効力感の高さが、その分野において個人がよりよく機能できることと関連していることは指摘されている (Kirk et al., 2008)。感情の分野における自己効力感の効果は、摂食障害の問題 (Terence, Fairburn, Agras, Walsh & Kraemer, 2002) や、カウンセリングの効果性 (Larson & Daniels, 1998) や、トラウマの処理 (Benight & Bandura, 2004) との関連において示されている。

これらのことから、感情の領域においても自己効力感が存在し、感情の機能に関する自己効力感、実際の感情の処理過程に影響する可能性がうかがえる (Kirk, Schutte, & Hine, 2008)。このような観点から、感情機能に関する自己効力感「感情自己効力感」として捉えられ、研究されはじめている (Saarni, 1999 ; ; Petrides and Furnham, 2003 ; Petrides, Sangareasu, Furnham, and Fredrickson, 2006)。

Saarni (1999) は、感情コンピテンスの8番目のスキルとして、感情自己効力感を提唱している。Saarniは、感情自己効力感とは、「感情経験を受け入れること」、「感情経験をコントロールしていると感じること」と考えており、感情自己効力感が高い人は、嫌な感情に対し、どのように対処したらよいか知っており、嫌な感情の強さ、継続している時間、頻度などを、適切で適応的な行動をとることで調節しているとしている。また、感情自己効力感、感情コンピテンスにおけるその他のスキルの獲得を前提としており、青年期以降に獲得されるものとしている。また、感情自己効力感、感情コンピテンスと同様に、その中にスキルを含む上位の概念であり、感情経験、自己価値、パーソナリティ、対人関係の歴史を反映するものであると考えているが (Saarni et al., 2006)、感情コンピテンスと感情自己効力感との違いについては述べられていない。

また、Petrides & Furnham (2003) や、Petrides et al. (2006) は、先述した感情知能の特性モデルを、「感情自己効力感 (emotional self-efficacy)」と呼び、同等と見なしている。しかし、Kirk et al. (2008) は、特性モデルは感情的な機能に関する自己評価と気質的要素を含んでいるものであり、感情機能の自己評価である感情自己効力感と同等に扱うべきではないとしている。そこで、Kirk et al. (2008) は、感情の適応的機能に関する個人の信念にのみ焦点を当てた感情自己効力感尺度 (Emotional Self-Efficacy Scale : ESES) を作成し、その信頼性、妥当性の検証を行っている。その結果、感情自己効力感尺度は十分な信頼性を示す一方で、特性感情知能の尺度と高い正の相関を示すなど妥当性に欠けるものであった。

このように、感情に関する自己効力感についてもその存在は明らかであり、その重要性はうかがえるものの、感情自己効力感に焦点を当てた研究が少なく、その他の概念と明確に区別されていないという問題が明らかとなった。しかし、福島 (1985) は、心理療法における自己効力感の役割について、自己効力感の度合いに応じて心理療法の治療効果を表すと指摘し、さらに自己効力感が高い人は自信に満ちた行動をする (Bandura, 1977) と示唆しており、自己効力感を持つことは社会生活を適応的に送るために重要なものである。また、感情は対人関係を構築し、維持することに重要な役割を果たすと考えられ (Campos et al., 1989)、とりわけ感情分野における自己効力感、個人の心理的適応や社会的適応に大きな役割を果たしている可能性がうかがわれる。従って、今後、他の概念との独自性を明確にした上で、感情自己効力感についてより詳細に研究される必要があると思われる。

以上、感情知能、感情コンピテンス、感情自己効力感を取り上げ、それらに関する研究を概観してきた。これら3つの概念はそれぞれ異なった感情の適応的機能を示していると考えられるが、重複している部分も多く、概念間で混乱が見られる。今後、感情の適応的機能を実証的に研究し、実践的に活用するためには、これらの概念の整理が必要であると思われる。そこで、次節ではこれまでの感情の適応的機能を示す概念の問題点を指摘し、整理していく。

5. 概念的整理

(1) 感情知能と感情コンピテンス

感情知能と感情コンピテンスは、感情の機能的側面に着目した方向性は同じであり、同義と考えられることがある (Ciarrochi, et al., 2001)。たとえば、Boyatzes et al. (2000) は、Emotional

Competence Inventory (ECI) を作成しているが、ECIは Emotional Competence という用語を使用しており、実際は感情知能の特性モデルに基づく尺度として作成されている。

このように、感情知能と感情コンピテンスの違いははっきりと区別されていない。そこで、相川 (2001) も両者の違いを明確にする必要があるとして、その違いについて検討している。その結果、知能が有機体の持つ全体的な能力であるのに対して、コンピテンスは人が環境と効果的に関わる際に感じられる効力感を追求しようとする過程で得られるものである (相川, 2001)。また、相川 (2001) は、感情知能は有機体の持つ、素質も含めた情動面での知的な能力を強調しているが、感情コンピテンスは、情動的な活動の結果、環境に効果を生み出し変化をもたらすことによって得たスキル、さらに効力感を含んでいるとも指摘している。ここでは、能力やスキルという類似した用語が用いられているが、感情知能の場合の能力とは、感情に関する情報処理能力であり、感情コンピテンスに含まれるスキルとは、社会的文脈の各状況において適応的に用いられる感情に関する技術であると考えられる。

他方、相川 (2001) では、能力モデルの感情知能と感情コンピテンスとの違いについてのみ述べており、特性モデルとの違いについてはふれられていない。Ciarrochi & Scott (2006) が、自己報告型の感情知能検査、つまり特性モデルの感情知能は感情コンピテンスを測定していると指摘しており、特性モデルと感情コンピテンスとの区別がされておらず、これらの概念の違いについても明確にしておく必要があると考えられる。

Saarni (2007) は、特性モデルと感情コンピテンスはよく似ているが、感情コンピテンスは発達の観点を重視し、個人が社会化を通して獲得してきた社会的文脈や道徳性を強調する概念であるとしている。他方、特性モデルはパーソナリティ特性を含んでいることを指摘し、“感情コンピテンスは、人間の性格を記述する必要はなく、相互作用を記述するものである (p. 84)” と述べている。つまり、感情コンピテンスは、パーソナリティ特性を含む特性モデルに比べて、人と環境との相互作用や社会的文脈だけではなく、認知発達と社会的履歴を重視した、より力動的な概念であると考えられる。さらに、方法論においても、Saarni (2007) は、感情コンピテンスは力動的な概念であるので、質問紙などにより、量的に捉えることはできないと指摘している。この点からも、質問紙において測定できるとされる特性モデルとの違いがうかがえる。

以上、感情知能と感情コンピテンスの概念の違いについて述べ、感情知能の能力モデルが感情的側面における能力そのものに焦点を当てているのに対し、感情コンピテンスは環境との相互作用の結果得られる効力感に焦点を当てている点、そして特性モデルがパーソナリティ特性を含み静的な概念であることに対して、感情コンピテンスは社会的文脈を重視する力動的な概念である点を挙げた。

(2) 感情コンピテンスと感情自己効力感

Saarni (1999) は、上述したように感情コンピテンスを「感情が引き出される社会的相互作用の中における自己効力感の現れ」と定義し、コンピテンスと自己効力感をほとんど同義としている。しかし、そもそも理論的背景の違う概念を同義と捉えることはできない。また、Saarni (1999) は、感情コンピテンスを構成するスキルの中に、「感情自己効力感の能力」を含めているにもかかわらず、両者の違いについて明確に述べていない。このような問題点を踏まえ、

ここではまずコンピテンスと自己効力感の違いについて検討した上で、感情コンピテンスと感情自己効力感の相違点について述べる。

先述したように、コンピテンスとは人間が環境と効果的に相互作用するための能力であり、さらに能力だけでなく、環境に働きかけたり、変化させたり、環境との相互作用において有能さを追及しようとする動機付けも含むものである。また、人は効力感を追及しようとする環境と相互作用しているうちに次第に知識やスキルが身につくとされる (橋本, 1999)。このコンピテンスという概念は White (1959) によりはじめて提唱されたが、White (1959) はそもそも精神分析的自我心理学の立場からコンピテンスを提唱しており、コンピテンスを獲得するという考えを核にした自我エネルギー概念を組織化することによって、自我の能動性を説明しようとした (White, 1963)。それに対して、Bandura (1977) は、コンピテンスは動機付けを含むため、動機付けを測定することは難しく、実証的に研究されにくいと考え、社会的学習理論の中で自己効力感という概念を提唱した。自己効力感の研究においては、効力予期が測定されるため、効力予期が一般性、対処行動の維持などに及ぼす効果を実証的に明らかにすることができるとしている (Bandura, 1985)。このように、コンピテンスは精神分析的自我心理学の立場から、一方、自己効力感は社会的学習理論の立場から提唱された概念であるため、これらは本来理論的に相容れない概念である。

また、Bandura (1977) も、自己効力感とコンピテンスの違いについて、コンピテンスは長期にその環境とのやり取りを通して、発達するものであり、自分自身の行動によって生み出された効果に注目しているが、自己効力感直接的・間接的な経験によってもたらされた情報の様々な資源からなるものとしている。さらに Bandura (1985) によると、コンピテンスは、あいまいな予測しがたいストレスとして作用するような状況をうまく切り抜けるために、「認知的」な、「社会的」な、「行動的」な技能を用いることができるような生産的な能力を意味しているが、自己効力感は一一人ひとりの人間が自分自身の持つこのような能力について判断していくときの内容を意味していると指摘している。つまり、自己効力感「今、そのことが自分にできるかどうか」といったような具体的な1つ1つの行為の遂行可能性の予測に関するものであり、行動に直結した概念である (福島, 1985)。

これまでコンピテンスと自己効力感との違いについて明らかにされているにもかかわらず、感情コンピテンスと感情自己効力感が概念的に混同されるのはなぜだろうか。

感情コンピテンスの定義の中に自己効力感が含まれているという点について、Saarni (1999) は感情コンピテンスを効力感と捉えていると考えられる。相川 (2001) が指摘するように、感情コンピテンスには効力感が含まれていると考えられる。加えて、上淵 (2008) は、乳幼児の認知発達研究で使用される効力感あるいは自己効力感の意味は、非常にあいまいであり、素朴であると示唆している。このことから、Saarni (1999) がいう定義の中で用いている自己効力感は、上淵 (2008) が指摘しているようなあいまいで、単純な効力感を指していると考えられる。

次に、感情コンピテンスのスキルの中に感情自己効力感が含まれている点について考察する。Saarni (2006) は、先述したように、感情自己効力感を、感情コンピテンスと同様に、その下にスキルを含む上位の概念であるとし、感情経験、自己価値、パーソナリティ、

対人関係の歴史を反映するものと指摘している。しかし、Bandura (1977) は、自己効力感の主要な情報源として、遂行行動の達成、代理的経験、言語的説得、生理的状态を挙げており、パーソナリティや生育歴などについては仮定していない。さらに、上淵 (2008) は、自己効力感とは、単純な「できる」という予期的感覚ではなく、手段-目標関係を前提とした、手段の利用可能性の主観的確率であると指摘していることから、感情自己効力感とは Saarni (1999) が指摘しているような包括的概念ではなく、意図した目標を達成するために用いられる感情に関する行動の遂行可能性を示していることがうかがえる。

(3) 感情自己効力感と感情知能

Petrides ら (2003; 2006) が感情自己効力感と感情知能の特性モデルと同義と見なしているように、その区別があいまいであることが指摘されている (Kirk et al., 2008)。

Kirk et al. (2008) は、感情の機能の自己評価を感情自己効力感と捉え、Salovey & Mayer (1990) の理論に基づき ESES を作成している。しかし、Kirk らは、感情自己効力感を特性モデルの1側面としても捉えており、結果にも ESES と特性モデルを測定している尺度との間に高い相関が見られ、その違いが明確にされていない。また、Brancnett et al. (2006) も同様に、Salovey & Mayer (1990) の理論に基づいた尺度 (Self-Rated Emotional Intelligence Scale : SREIS) を作成し、パーソナリティ尺度得点を統制した上で社会的適応との関連について検討している。その結果、パーソナリティ得点を統制した後では、SREIS と社会的適応を測る尺度との間に有意な関連が見られなかった。これらのことから、Kirk et al. (2008) が感情自己効力感を測定すると考える、感情機能の自己評価尺度は、感情知能の特性モデルやパーソナリティ特性との関連が強く、それらとの弁別性は立証されていない。

このように、現在、感情自己効力感という概念は提唱されているが、その独自性が実証的に明らかにされていない。Kirk et al. (2008) は、感情の機能に関する自己評価を感情自己効力感として捉えているが、感情の機能に関する自己評価は特性モデルの感情知能に含まれており (Bar-on, 1997)、感情の機能に関する自己評価を感情自己効力感として定義することには問題があると考えられる。

上述したように、自己効力感とは具体的な1つ1つの行為の遂行可能性の予測に関するものであり、行動に直結した概念であることから (福島, 1985)、感情自己効力感も感情に関係する1つ1つの具体的な行動に関する遂行可能性の予測であると考えられる。これまで Kirk et al (2008) や Brancnett et al (2006) の作成した感情機能に関する自己評価尺度では、抽象的な機能についての質問項目が多く (たとえば、「Do you have a good emotions vocabulary ?」 や「Understand what causes your emotions to change」)、これらの質問項目は、先述したように感情知能の特性モデルを示しているに過ぎないと考えられる。これらのことから、今後感情自己効力感を測定するには、感情に関するより具体的な行動やスキルに焦点を当てる必要があると思われる。

(4) まとめ

以上、ここまで感情知能、感情コンピテンス、感情自己効力感についてそれぞれの概念の問題点・相違点について述べてきた。これらのことから、以下の点が示唆された。感情知能の能力モデルについては、感情の情報処理能力に焦点を当て課題遂行型検査により測

定されるなど独自の立場を築いている点、感情の特性モデルは、感情の機能に関する自己評価に加え、パーソナリティ特性も含めている点、感情コンピテンスは社会的状況や文化を重視しており、感情を引き起こす場面における素朴な効力感を表している点、最後に感情自己効力感とは、感情に関する具体的行動の遂行可能性の予測として捉えることができる点が挙げられた。

6. 今後の課題

本稿においては、近年、国内外の感情研究において取り上げられている感情の適応的機能に関する概念の中から、感情知能、感情コンピテンス、感情自己効力感に関する実証的研究を概観し、その概念の問題点や相違点について考察した。

今後の課題として、これらの感情の適応的機能を対人場面や学校場面における子どもの不適応に対する予防的介入やスキルトレーニングに応用していくことが必要であると考えられる。そのためには、予防的介入などの視点を含めた感情の適応的機能を正確に測定する尺度を作成する必要があると思われる。

概観したように、これまでも感情の適応的機能を測定することが試みられている。感情知能では、感情情報処理能力に焦点をあて、課題遂行型検査や質問紙による自己評価尺度が作られている。しかし、Saarni (2000) は、感情知能には学習や発達に対する見方が欠如していると指摘しており、現在のところ感情知能を予防的介入やトレーニングに応用しようとする研究は見当たらない。他方、感情コンピテンスはスキルから構成されるが (Saarni, 1999)、研究者ごとに感情コンピテンスを構成するスキルが異なっている (Ciarrochi & Scott, 2006; Wong & Ann, 2007)。さらに、感情コンピテンスは、社会的状況に依存しており、1つのスキルはある状況では適応的であるが、他の状況では適応的ではないかもしれないなど、その状況に応じたスキルとして考えられており、介入などには応用できない可能性がうかがえる。一方、先述したように、Bandura (1985) は自己効力感を心理療法などにも適用しており、自己効力感とは治療や介入を考慮している概念である。従って、感情の適応的機能を予防的介入やスキルトレーニングに応用していく際、感情自己効力感に焦点を当てて検討していくことは重要であると思われる。しかし、感情自己効力感に関する研究は少なく、今後感情自己効力感を実践的に応用していくためには、まず感情自己効力感を適切に測定する尺度を作成し、その効果を明らかにしていく必要があると考えられる。

引用文献

- 川川 充 (2001). 情動知能の一部としての情動解読能力の測定に関する研究 平成12年度~平成13年度科学研究費補助金基盤研究 (c) (2) 研究成果報告書
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy : Toward a Unifying Theory of Behavioral Change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Bandura, A. (1985). 自己効力 (セルフエフィカシー) の探求 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊 (編著) 社会的学習理論の新展開 金子書房 pp. 103-141.
- Bar-on, R. (1997). Bar-on Emotional Quotient Inventory : Technical manual. Toronto, Ontario, Canada : Multi-Health Systems.

- Bar-on, R. (2000). Emotional social intelligence : Insights from the Emotional Quotient Inventory. In R. Bar-on & D. A. Parker (Eds.), *Handbook of emotional intelligence* San Francisco : Jossey-Bass. pp.363-388.
- Benight, C. C. & Bandura, A. (2004). Social cognitive theory of posttraumatic recovery : The role of perceived self-efficacy. *Behavioral Research and Therapy*, **42**, 1129.
- Boyatzes, R. E., Goleman, D. Rhee, K. (2000). Clustering competence in emotional intelligence : Insights from the Emotional Competence Inventory (ECI). In R. Bar-on & D. A. Parker (Eds.), *Handbook of emotional intelligence*. San Francisco : Jossey-Bass. pp.343-362.
- Branckett, M. A. & Mayer, J. D. (2003). Convergent, discriminant, and incremental validity of competing measures of emotional intelligence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1147-1158.
- Brankett, M. A., Mayer, J. D., & Warner, R. M. (2004). Emotional intelligence and its relation to everyday behavior. *Personality and Individual Differences*, **36**, 1387-1402.
- Branckett, M. A., River, S. E., Shiffman, S., Lerner, N. L., & Salovey, P. (2006). Relating Emotional abilities to Social Functioning :A Comparison of Self-Report and Performance Measure of Emotional Intelligence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 780-795.
- Campos, J. J., Campos, R. G., & Barrett, K. C. (1989). Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, **25**, 394-402.
- Cannon, W. B. (1927). The James-Lange theory of emotions : A critical examination and an alternative theory. *American Journal of Psychology*, **39**, 106-124.
- Ciarrochi, J. V., Deane, F. P., & Anderson, S. (2002). Emotional intelligence moderates the relationship between stress and mental health. *Personality and Individual Differences*, **32**, 197-209.
- Ciarrochi, J. V. & Scott, G. (2006). The link of between emotional competence and well-being : a longitudinal study. *British Journal of Guidance & Counseling*, **34**, 232-243.
- Damasio, A. (1994). *Descarte's error : Emotion, reason, and the Human Brain*. New York:Putnam. (田中光彦(訳)(2000). 生存する脳 講談社)
- Davis, M., Stankov, L. & Roberts, R. D. (1998). Emotional intelligence : in search of an elusive construct. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 989-1015.
- Dawada, D. & Hart, S. D. (2000). Assessing emotional intelligence : Reliability and validity of the Bar-on Emotional Quotient Inventory (EQ-i) in university students. *Personality and Individual Differences*, **28**, 797-812.
- Dawin, C. (1872). The express of emotions in man and animals. Chicago : University of Chicago Press. (浜中浜太郎(訳)(1931). 人及び動物の表情について 岩波書店)
- Denham, S. A., Blair, K. A., DeMulder, E., Levitas, J., Sawyer, K., Auerbach-Major, S., & Queenan, P. (2003). Preschool emotional competence : Pathway to social competence ? *Child Development*, **57**, 1309-1321.
- 遠藤利彦 (2007). 感情 海保博之 (監修) 心理学総合事典 朝倉書店 pp. 304-334.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Guthrie, I. K. & Reiser, M. (2000). Dispositional emotionality and regulation : Their role in predicting quality of social functioning. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 136-157.
- Feldman, R. S., Philippot, P., & Custrini, R. J. (1991). Social competence and nonverbal behavior. In R. S. Feldman & B. Rime (Eds.), *Fundamentals of nonverbal behavior*. New York : Cambridge University Press. pp. 329-350.
- Forgas, J. P., Moylan, S. (1987). After the movies : Transient mood and social judgments. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **13**, 467-477.
- 福島脩美 (1985). 自己効力感 (セルフエフェカシー) の理論 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊 (編著) 社会的学習理論の新展開 金子書房 pp. 35-52.
- Garder, H. (1983). *Frames of mind : The theory of multiple intelligences*. New York:Basic Books. (松村暢隆(訳)(2001). MI : 個性を生かす多重知能の理論 新曜社)
- Goleman, D. (1995). *Emotional intelligence*. New York : Bantam. (土屋京子(訳)(1996). EQ : こころの知能指数 講談社)
- 橋本憲尚 (1999). コンピテンス 中島義明・安藤清志・子安増夫・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣 pp. 284.
- Izard, C. E. (2002). Translating emotion theory and research into preventive interventions. *Psychological Bulletin*, **128**, 796-824.
- James, W. (1884). What is emotions? *Mind*, **4**, 188-204.
- Kirk, B. A., Schutte, N. S., & Hine, D. W. (2008). Development and preliminary validation of an emotional self-efficacy scale. *Personality and Individual Differences*, **45**, 432-436.
- 久木山健一 (2002). 情動コンピテンスと社会的情報処理の関連－アサーション行動を対象として－ カウンセリング研究, **35**, 66-75.
- Larson, L. M. & Daniels, J. A. (1998). Review of the counseling self-efficacy literature. *The counseling Psychologist*, **26**, 179-218.
- Lazarus, R. S. (1991). Emotion and adaptation. New York : Oxford University Press.
- Lopes, P. N., Branckett, M. A., Nezek, J. B., Schutz, A., Sellin, I., & Salovey, P. (2004). Emotional Intelligence and social interaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 1018-1034.
- Lopes, P. N., Salovey, P., & Straus, R. (2003). Emotional Intelligence, personality, and the perceived quality of social

- relationships. *Personality and Individual Differences*, **3**, 641-659.
- Mayer, J. D. (2001). A field guide to emotional intelligence. In J. Ciarrochi, J. P. Forgas, & J. D. Mayer (Eds.), *Emotional intelligence in every life: A scientific inquiry*. New York: Psychology Press.
- Mayer, J. D. & Bremer, D. (1985). Assessing mood and affect-sensitive tasks. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 95-99.
- Mayer, J. D., Carso, D. & Salovey, P. (1999). Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. *Intelligence*, **27**, 267-298.
- Mayer, J. D., Carso, D. & Salovey, P. (2002). The Mayer-Salovey-Carso *Emotional Intelligence Test (MESCEIT)*, Version 2.0. Toronto, Ontario, Canada: Multi-Health Systems.
- Mayer, J. D. & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. J. Sluyter (Ed.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. New York: Basic Books. pp. 4-30.
- 大対香奈子・大竹恵子・松見淳子 (2007). 学校適応アセスメントのための3水準モデル構築の試み 教育心理学研究, **55**, 135-151.
- 大竹恵子・島井哲志・内山喜久雄・宇津木成介 (2001). 情動知能尺度 (EQS: エクス) の開発と因子的妥当性, 信頼性の検討 産業ストレス研究, **8**, 153-161.
- 大嶽典子・五十嵐秀子 (2005). 思春期における過剰適応とその関連要因 上越教育大学心理教育相談研究, **4**, 151-161.
- Parke, R. D. (1994). Social and emotional development in a relational context: Friendship interaction from early childhood to adolescence. In T. J. Berndt & G. W. Ladd (Eds.), *Peer relationships in child development*. New York: Wiley. pp. 95-131.
- Parker, J. D., Taylor, G. J., & Bagby, R. M. (2001). The relationship between alexithymia and emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, **30**, 107-115.
- Petrides, K. S. & Furnham, A. (2000). On the dimensional structure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, **29**, 313-320.
- Petrides, K. S. & Furnham, A. (2003). Trait emotional intelligence: Behavioral validation in two studies of emotion recognition and reactivity to mood induction. *European Journal of Personality*, **17**, 39-57.
- Petrides, K. S., Sangareau, Y., Furnham, A., & Fredrickson, N. (2006). Trait emotional intelligence and children's peer relations at school. *Social Development*, **15**, 537-547.
- Saarni, C. (1990). Emotional Competence. In Ross Thompson (Ed.), *Nebraska symposium: Socioemotional development*. Lincoln, University of Nebraska Press. pp. 115-161.
- Saarni, C. (1997). Emotional competence and self-regulation in childhood. In Salovey, P. & Sluyter, D. J., (Eds.), *Emotional Development and Emotional Intelligence: Educational Implications*, pp. 35-69.
- Saarni, C. (1999). The Development of Emotional Competence. New York: The Guilford Press. (佐藤香監訳 (2005). 感情コンピテンスの発達 ナカニシヤ出版)
- Saarni, C. (2000). Emotional Competence. In R. Bar-on & D. A. Parker (Eds.), *Handbook of emotional intelligence*. San Francisco: Jossey-Bass. pp.68-91.
- Saarni, C. (2007). The Development of Emotional Competence: Pathways for Helping Children to Become Emotionally Intelligent. In R. Bar-on, J. G. Maree., & M. J. Elias., *Educating People to Be Emotionally Intelligent*. London: PRAEGER. pp. 15-36.
- Saarni, C., Campos, J. J., Camras, L. A. & Witherington, D. (2006). Emotional Development: Action, Communication, and Understanding. In W. Damon (Editor-in-Chief) & N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development (6th ed.)*. New York: Wiley. pp. 226-299.
- 崔 京姫・新井邦二郎 (1997). 「感情の表出と制御」研究の概観 筑波大学心理学研究, **19**, 29-35.
- Salovey, P. & Birnbaum, D. (1989). Influence of mood on health-relevant cognitions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 539-551.
- Salovey, P. & Mayer, J. D. (1990). Emotional Intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, **9**, 185-211.
- Singer, J. A. & Salovey, P. (1988). Mood and memory: Evaluating the network theory of affect. *Clinical Psychology Review*, **8**, 211-251.
- Terence, W. G., Fairburn, C. C., Agras, W. S., Walsh, B. T., & Kraemer, H. (2002). Cognitive-behavioral therapy for bulimia nervosa: Time course and mechanisms of change. *Journal of Clinical and Consulting Psychology*, **20**, 267-274.
- 上淵 寿 (2008). 感情研究と動機づけ研究の関係 上淵寿 (編) 感情と動機づけの発達心理学 ナカニシヤ出版 pp. 1-24.
- White. R. W. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, **66**, 297-333.
- White. R. W. (1963). *Ego and reality in psychoanalytic theory: A Proposal Regarding Independent Ego Energies*. New York: International Universities Press. (中園正身訳 (1985). 自我のエネルギー 精神分析とコンピテンス 新曜社)
- Wong, S. S. & Ang, R. P. (2007). Emotional competencies and maladjustment in Singaporean adolescents. *Personality & Individual Differences*, **43**, 2193-2204.